

鳥取城調査研究年報

第17号

2024.3

鳥取市教育委員会

鳥取城調査研究年報
第17号

例 言

1. 本年報は、令和5年度の史跡鳥取城跡附太閤ヶ平にかかる調査研究成果の報告書である。
2. 本書の編集は、坂田邦彦(鳥取市教育委員会文化財課文化財専門員)が担当した。

目 次

【報告1】

「宝隆院庭園の歴史と樹木」 佐野淳之・伊藤康晴

はじめに	1
1. 歴史と樹木の調査について	1
2. 宝隆院と扇御殿の造営	2
3. 宝隆院庭園の成り立ち	3
4. 幕末明治の宝隆院・池田整子	4
5. 宝隆院庭園の樹木	5
おわりに	10

【報告2】

「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平の城郭研究15年」 細田隆博

はじめに	13
1. 鳥取城の城郭研究の歩み	13
2. 鳥取城の城郭研究15年	15
3. これからの鳥取城研究	16
おわりに	17

宝隆院庭園の歴史と樹木

森林教育研究所・樹木医 佐野 淳之
鳥取市歴史博物館学芸員 伊藤 康晴

はじめに

本稿は鳥取城跡にある「宝隆院庭園」の歴史性について、古文書(藩政資料)と庭園の樹木調査の成果から報告するものである。庭園は日々変化する存在であるが、鳥取城跡における庭園の現状を記録として残すことには意義がある。すなわち、宝隆院庭園の成り立ちを明らかにして、そこに生育する樹木の樹齢と生育状態の調査成果から宝隆院庭園の歴史との関係性を考察することを目的とする。

宝隆院庭園は、江戸時代の末期に大手登城路の北側に新築された「扇御殿」の庭である。宝隆院とは11代鳥取藩主となった池田慶栄の夫人池田整子のことである。慶栄が17歳で没すると、整子も17歳で受成して宝隆院と号した。御殿には扇形の意匠が好んで用いられたといわれ、落成後は扇御殿と称された。

明治時代には扇御殿跡に池田侯爵家の洋館別邸「仁風閣」(国重文)が建造されて、付近は様変わりするが、宝隆院庭園は新たに仁風閣の庭として歩んだ¹。平成元年(一九八九)には鳥取市指定文化財(名勝)になっている。

1. 歴史と樹木の調査について

鳥取藩主池田家の庭園に関する研究は、從来活発であったとは言えない分野である²。鳥取藩は豊富な藩政資料を今に伝えているが³、茶庭など作事の具体的な内容については、まとまった資料が残されていないばかりか、藩役所の日記にもほぼ記録されないと、不明な点が多いことが、その背景にあると言つて差し支えないだろう。

日記に記録されないのは、日記に残す内容に限度

があるのは勿論であるが、一つには現場の小奉行の対応に一定程度任せていたからであると考えられる。その一端について、鳥取城に隣接する水道堤の新規普請の事例⁴から少し述べるならば、作事奉行による比較的軽微で、個別完結性の高い普請については、「臨時」の扱いで「入用清帳」という薄手の帳を作成して事業を推進・管理することが通例とみられる⁵。庭園の築造なども同様と思われ、「臨時」の個別対応で推進されたと思われる。

本稿で扱う宝隆院庭園の作庭についても、記録資料がほとんど残されていないことから、これまで取り組んできた東照宮神域(櫛輪神社社叢)や鳥取城跡の共同研究と同様⁶、古文書と樹木の調査からアプローチしてみたい。

写真1 宝隆院庭園(2023年)二ノ丸から望む



樹木の調査は、宝隆院庭園を中心に生育している主要な樹木および切株を対象として、樹種を同定し、胸高直径(DBH)と樹齢を測定した。切株では、断面の年輪数を数えてそれを樹齢とした。立木では、これまでの鳥取城址の樹木調査⁷と同様に、成長錐を用いてコアを採取した。コアを研究室に持ち帰って木片に固定し、実体顕微鏡で年輪数を数えた。髓(木の中心)まで到達していたコアについてはそれを樹齢とし(記号◎)、髓近くまで到達していたコアについては年輪の曲率半径から髓の位置を推定して残

りの年輪数を読めたところまでの年輪数に加えて推定樹齢とした(記号○)。中心部が腐食していたり、コアが體の近くまで採取できなかつたものについては、年輪が読めたところまでの年輪数と長さから平均半径成長量を算出して全体の年輪数を推定して推定樹齢とした(記号△)。推定の確からしさを示す記号は後述の表1で使用している。

2. 宝隆院と扇御殿の造営

宝隆院庭園は江戸末期・文久3年(1863)に作庭されているが、時代を少し遡り「宝隆院庭園」成立の背景について確認しておく。

10代藩主池田慶行は、嘉永元年(1848)参勤から帰国した翌6月、俄に病を発して17歳で死去した。その跡をうけ幕府の命により養嗣子となったのが加賀前田家の裔松丸、11代藩主となる15歳の慶栄である。藩主就任直後に10代慶行の妹で、同年齢の整子と婚儀が執り行われた。嘉永3年初めて帰國の暇を得て5月上旬に江戸を発足するが、同23日京都伏見別邸において前藩主と同様17歳で急死する。整子は受成して当初「宝台院」と号したが、すぐに「宝隆院」と改めた⁸。

ペリーの来航以後、江戸内湾に面した池田家下屋敷(芝金杉)が変転する中、安政地震の影響もあり、宝隆院は安政5年(1858)から大川(隅田川)新大橋の袂の浜町屋敷に住居した⁹。文久2年正月の記録には浜町屋敷にも「扇御殿」と称する宝隆院の住居が確認されることから¹⁰、扇形の意匠を多用した御殿のルーツは帰国以前の江戸屋敷にあるようである。

文久2年(1862)8月、幕府は参勤交代制度を緩和する。12代藩主夫人となった寛姫、東館池田家(分知家)の嫁姫は、11月には帰國の途に就き、12月半ばに鳥取に帰着している。鳥取藩は藩主夫人の移住に合わせ、11月末に「松平相模守奥向雜荷物」として石燈籠4基、庭石70個、石井筒2個、植木51本を江戸から相模国浦賀番所經由で回漕している¹¹。造園のための物資であるとわかる。植木には「但し鉢植ニ無之」と補記されている。鉢植ではなく、相応に樹齢のある庭木が51本も運ばれたのである。おそらく

く根廻しされた状態(樹木の根を茎で丸く包みまとめる)こと)で、他の物資と共に江戸から海路鳥取に運ばれた。藩主夫人らの元国帰国に際し、江戸屋敷での日常的な景を、新たな居住地となる鳥取城の庭に再構成したと理解される¹²。

宝隆院も当初は寛姫と同じ時期に帰国の予定であったが、やや遅れて翌文久3年3月7日に江戸を発ち4月12日に鳥取に着いている。宝隆院の住居は帰国直前まで藩主・藩主夫人と同じ三ノ丸を予定していたが、到着前4月3日になって「御内馬場え此度宝隆院様御住居向御新建相成候処、同所御馬見所射手小屋共地平し之差支相成候付、御取扱被仰付、并御馬場番え小屋明ケ被仰候」とあるように、急遽内馬場に新規に建造されることになり、慌ただしく諸施設の取り扱いが命じられて普請に着手することになった¹³。三ノ丸が手狭であるために別殿になつたもので¹⁴、宝隆院は新御殿(以下「扇御殿」と表記する)が出来るまで三ノ丸藩主御書院に住居し¹⁵、家老衆と面会する時は三ノ丸金ノ間を使用した¹⁶。江戸から移送された荷物は、二ノ丸走槽一円を御道具置き場とされ運び込まれている¹⁷。

扇御殿の整地(地取)を終えたのが5月21日。その後大雲院により「御地淨」地鎮祭を行なうことになるが、帰国後初めての外出記録が見られるのもこの頃

写真2 宝隆院(池田整子・紫雲)肖像 鳥取県立博物館蔵



で、5月22日「宝隆院様、今朝六半時之御供攝、御本供ニ面、御城内八幡宮え御參詣、夫より興禪寺え被成御仏詣」とある。宝隆院は江戸の三田にあった東館池田家の藩邸で誕生した。産土神は兄の10代藩主池田慶行と同じ三田八幡宮(現東京都港区三田の御田八幡神社)である。慶行は鳥取城二ノ丸御殿を約130年ぶりに再建し、その御安鎮として東館池田家の江戸の産土神である三田八幡宮を鳥取城内の高台に勧請している¹⁸。宝隆院も自身の産土神にまず参詣してから、先祖の菩提寺である興禪寺に仏詣したことがこの記録から理解される。

扇御殿の普請は「諸職人差支へ」があり5月から7月まで中断されるも、7月28日には「上棟の式」が執行されるのであるが、その直前7月25日には次のような記録が見える。

【資料】

一、宝隆院様御新殿御褒将所南側え新規御庭築立之儀、御茶道申達候旨、御厨御用入申達、承届候事¹⁹

扇御殿の御庭を新規に築立することを御茶道が御側御用人を通して上申して承認されていることがわかる。扇御殿の新築に伴ない予定のなかった作庭に急速着手することになった。これがのちの宝隆院庭園である。資料からは宝隆院の御寝所の南側に接して庭を築立されたのがわかる。現在は仁風閣のテラスから池泉まで20メートル以上離れているが、御寝所は池泉の近くに建っていたと想像される。

扇御殿は同年8月11日に落成。同17日には大雲院が御殿の御居間ににおいて御淨の祈祷をおこなった。宝隆院は三知麿(後の13代蟻知)と共に、7月24日から勝見御茶屋に湯治滞在していたが、8月18日に揚湯となり新築の扇御殿に移居している²⁰。

3. 宝隆院庭園の成り立ち

「御茶道」から「御庭築立」が上申されて作庭されたことは分かったが、御茶道の誰かは管見の限り記録に見られない。どのような人物が作庭したのであろうか。

江戸前期から中期にかけての鳥取藩の御茶道は、小堀遠州の門人であった山本宗賢や三上宗与(宗賢の次席)を主な扱い手に発展したとみられる²¹。宗賢については「此人山本家の元祖にて、往年小堀遠州公より御当家へ御貢ひに相成候にや」と伝えられている²²。宗賢の子宗林は、城下の慶安寺書院の庭、東館池田家の御庭、因州東照宮の弁財天社の池泉回りを手掛けたとされ²³、特に泉水を得意としたようである。他にも芳心寺、本慈院の庭を手掛けていると考えられる²⁴。池田家と縁の深い庭を作庭しており、鳥取城下町に多くの作例を遺している。

江戸時代の後期になると、三上家は御茶道召し放ちとなる。山本家は宗賢・宗林の時代、200石を拝していたが、宗林の養子となった3代舍人(のち外記)の時代には大幅に加増され、1200石の上級藩士になる。以後、御茶道とは異なる役職にすすみ、戊辰戦争で活躍する8代玄蕃にいたるまで1200石を維持した。

遠州流の御茶道は宗林の弟子筋である市川宗佐らに担われたと考えられる。市川家は3代宗佐の時代、享保期に山本宗林の弟子となり、江戸や京都に御供して修行している²⁵。幕末期の7代宗佐は、鳥取藩江戸屋敷において数寄屋道具類の御用懸りをつとめ²⁶、若い御茶道見習いは宗佐に同道して修行し

写真3 鳥取城絵図(筆者一部改変) 鳥取県立博物館蔵



た²⁷。その後参勤交代の緩和で、文久3年に宝隆院が江戸から帰国する際は、鳥取において宝隆院の「御引越御待請御用懸り」を命じられている。

先に見たように扇御殿の「御庭築立」は「御茶道」に命じられていることから、市川宗佐が作庭に関与した可能性が高いと思われる。江戸で生まれ育った宝隆院が初めて鳥取での生活を始める時、「御引越御待請御用懸り」は重要な役職であり、また宝隆院の意向なく御用懸りが命じられたとは考え難い。宝隆院の近くにあり、御茶道としての信頼も築かたと考えられる。作庭された庭も宝隆院の意向を汲む内容と考えるのが自然であろう。

その他には、御茶道の家筋にあたる安藤惣右衛門の関与の可能性も想定される。「安藤宜茂家譜」によれば²⁸、「扇御殿御普請御用精勤致し万端都合能及出来候ニ付格別骨折勤労」につき加増されたとある。関与はあくまで「扇御殿御普請」つまり建物の方になるが、市川宗佐の近くにおいて作庭に関わる諸施設の建造に関与した可能性は想定し得る²⁹。また宝隆院が鳥取に帰国した翌年の元治元年正月、新たに宝隆院の御用間を仰せ付けられた町人の中に「植木商売」として植木屋甚十郎ら植木屋の存在があることにも留意すべきであろう³⁰。

先に見たように、当地はそれ以前、内馬場のあった場所である。また大手登城路に隣接していることからわかるように、旧藩主夫人の居住空間としては良好とは言えない環境である。宝隆院の扇御殿に相応しい空間にするため大規模な造成をしていくと考えられる。特に南側、大手登城路側には、久松山側から大規模な盛土が築かれており(カラタチの植栽されている築堤ではない³¹)、それは扇御殿離れの「化粧ノ間」の前付近まで続いている。少なくとも外からの視界を遮る必要から盛土を築いてその上で塀を築き、または樹木を植栽する必要があったと思われる。

盛土付近に植栽されているヒノキ(表門横)・スギ(切株)の中には、扇御殿が建造された年代と樹齢がほぼ一致する個体のあることが調査結果から得られていることから、この盛土造成が宝隆院庭園の作庭期、文久3年頃の普請である可能性を示唆している(表3参照)。

写真4 宝隆院庭園南側の盛土



4. 幕末明治の宝隆院・池田整子

鳥取における宝隆院の暮らしぶりについては、殆ど記録に残されていないが、扇御殿が完成する頃、勝見の温泉に湯治滞在しているよう、しばしば湯治に出かけている。例年春か秋、吉岡や勝見に1か月内外滞在している。その他には、興禅寺・奥谷清源寺(池田家墓所)の仏詣、倉田八幡宮、布施山王権現などに日帰りで出かけている³²。記録からは湯治以外の外出は限られている。

明治時代になると鳥取城は新政府の藩治職制による改革によって政治堂(政堂)と称されるようになり、鳥取城内の建物と扇御殿は家政司の管轄とされた³³。出湯(温泉)を備える吉岡・勝見・岩井の御茶屋(別邸)は然るべき在宅に与えて本陣を仰せ付けるとされた。宝隆院は明治5年の秋まで吉岡御茶屋を利用している。

明治4年(1871)7月の廃藩置県後、扇御殿は鳥取県に収公された。8年間居住した扇御殿を後にした宝隆院は、同年9月23日に池田家の私邸とされたかつての西館池田家屋敷である池田家上邸(鳥取県庁付近)に移居している。明治5年4月、宝隆院は仏式の法号を改め「紫雲」と称した。池田家上邸には約2年余り居住したのち、明治6年10月には、藩政時代銀札場であった掛出の池田家別邸(鳥取県民文化会館駐車場の中央、ムクノキの南側付近)に移居。翌年東京に移住するまで当屋敷に居住した。

旧藩主池田慶徳は明治3年9月に鳥取を出發して東京に移住。次いで嫡子輝知が同年11月、夫人寛子は廃藩置縣の直後の同4年8月まで鳥取に住んだ。

最も長く鳥取に留まったのが紫雲(宝隆院)であった。明治7年6月6日に鳥取を出発した紫雲は、途中12日に京都にて泉山御陵、真正院墓所などを参詣したのち、池田慶徳の出迎えを受け、祇園の梅尾で4年ぶりに対顔した。東京浜町の池田家屋敷に到着したのは7月2日である。その後、寺島村の本邸に暮らすも、明治12年5月12日、浜町屋敷において46歳の生涯を閉じている。

墓所は江戸時代以来池田家の菩提寺である向島の弘福寺であった。神式の墓石で正面には受戒以前の名で「池田整子之墓」と刻む。同寺院周辺は大正12年の関東大震災以後、区画整理のため道路を通すなど、墓域の改葬を余儀なくされた。

昭和5年(1930)には、12代藩主池田慶徳以後の遺骨は多磨墓地に³⁴⁾、それ以前の夫人および幼少男子15體の墓石・遺骨は鳥取奥谷の池田家墓所(現国史跡)に改葬された。その際に池田整子(紫雲)の墓石も移送され、夫である11代慶栄の墓前に安置されているが弘福寺にあったとされる「墓誌」は見られない。

5. 宝隆院庭園の樹木

調査対象とした樹木とその特徴や用途は以下の通りである(合計12種、立木18本、切株6本)。

- ・スギ 立木2本 切株3本 常緑針葉樹 ヒノキ科
スギ属 青森から屋久島までの暖地に自生全国に植林されている 建築用材として利用
- ・ヒノキ 立木1本 常緑針葉樹 ヒノキ科ヒノキ属 福島県から屋久島に分布 気孔帶Y 尾根筋岩場 横林各地 寺院神社の建築仏像
- ・ヒヨクヒバ 立木1本 常緑針葉樹 ヒノキ科ヒノキ属 サワラの園芸種で細枝は細長く下垂する 気孔帶X 病虫害に強く扱いやすい庭木
- ・モミ 立木2本 切株1本 常緑針葉樹 マツ科モミ属 本州から九州の海岸近くに分布 横谿公園にも多い 葉の先端が割れる 材は白い
- ・クロマツ 立木3本 常緑針葉樹 マツ科マツ属 本州から沖縄に分布 二葉松 葉は硬い 潮風に強い 尾根や岩場 街路樹庭園樹
- ・ナギ 立木1本 常緑針葉樹 マキ科ナギ属 本

州南岸から南西諸島に分布 離雄異株 広葉で縱方向に強い 神木建築舟材

- ・タブノキ 立木2本 切株1本 常緑広葉樹 クスノキ科タブノキ属 本州から沖縄に分布 海岸に多い 葉は互生して枝先に集まる 冬芽が大きい
- ・モッコク 立木2本 常緑広葉樹 モッコク科モッコク属 千葉県沿岸部から南西諸島に分布 葉柄赤い 病虫害に強く樹形が綺麗な庭園樹
- ・イロハモミジ 立木1本 落葉広葉樹 ムクロジ科カエデ属 福島県から九州に分布 対生 種子は翼が水平に開く 紅葉が綺麗で各地に植栽
- ・サクラ 切株1本 落葉広葉樹 バラ科サクラ属 天然にはヤマザクラ、オオシマザクラ、エドヒガンなど多くの種あり 鳥取城趾には古くから多くの種類のサクラが植栽されてきた記録が残っている
- ・ケヤキ 立木2本(前庭) 落葉広葉樹 ニレ科ケヤキ属 本州から九州の丘陵や河岸に分布 樹皮まだら葉ざらつく 並木・公園建築家具
- ・クスノキ 立木1本(前庭) 常緑広葉樹 クスノキ科ニッケイ属 本州以南の太平洋側に多く大径木になる 樟脳はこの葉や枝を蒸留して得られる

この中には、鳥取の社叢に多いスタジイ、イチョウ、ムクノキ、エノキなどの大径木や外来種は見られない。また、園芸品種である可能性があるのは、ヒヨクヒバとサクラ類のみである。

樹齢調査した樹木(立木と切株)を樹齢順に並べると表1のようになる。樹齢推定の確からしさの記号については本文の樹木調査の項を参照のこと。

表1より、今回の調査結果から、最高樹齢は160年前後と推定され、表2に示す広く鳥取城跡地の樹齢には及ばない。雖まで読めたものでは、129年のタブノキが最大樹齢を示していたが、100年を超える切株がスギ、タブノキ、モミで見られたので、伐採されなければさらに樹齢を延ばしたものと考えられる。

樹齢100年未満の樹木では、モッコク、スギ、クスノキ、ケヤキ、クロマツ、ナギなど多様な植栽が行われてきたことを示している。

表3に宝隆院に関する歴史年表に重ねた樹木の樹

表1 宝隆院庭園の樹齢調査結果

調査番号	位置	樹種	直径(cm)	推定樹齢	推定の根からしさ
3	裏門口	ヒノキ	60	161	△
切株1	裏門前	スギ	79	159	△
11	裏門口	スギ	40	145	△
12	庭園南東部	タブノキ	63	129	○
1	庭園南東部	タブノキ	75	128	○
切株3	階段上部	タブノキ	91	120	○
15	裏門道脇	モミ	50	119	○
切株2	池の南側	スギ	66	116	○
切株5	遊歩道脇	モミ	67	109	○
5	池泉土構脇	ヒヨクヒバ	41	107	○
2	庭園南東部	モミ	63	105	○
4	池泉北側	モッコク	40	99	○
14	裏門道脇	スギ	38	92	○
18	前庭	クスノキ	67	92	○
切株6	遊歩道脇	スギ	76	90	○
13	表門扉西	ケヤキ	85	89	○
8	池泉中島	クロマツ	26	87	○
19	前庭	ケヤキ	71	79	○
10	池の西側	モッコク	30	72	○
16	階段下右	イロハモミジ	40	71	○
7	仁風閣前庭	クロマツ	48	69	△
9	八角塔南側	クロマツ	39	65	○
6	庭園西側	ナギ	18	43	○
切株4	階段左奥	サクラ	35	30	○

(注)2020年調査 切株はそのときの年輪数

立木の樹齢は2023年推定値

表2 鳥取城跡地に生育する樹木の樹齢

調査番号	鳥取城跡樹木	樹種	直径(cm)	推定樹齢	推定の根からしさ
	夫婦杉の一本	スギ	108	319	△
	八幡宮跡	スギ	59	166	○
	天球丸北西	クロマツ	129	166	○
	天球丸南東	クロマツ	135	167	○
17	仁風閣庭園	クロマツ	81	154	△
	二ノ丸北西	イロハモミジ	36	139	○
	二ノ丸南東	イロハモミジ	37	75	○

(注)2020年調査 樹齢は2023年推定値

No.17のクロマツは2024年1月30日に伐採された円板より、初期成長が良く、樹齢124年と推定された

齡と樹種を示す。160年生のヒノキと160年を超えるスギの切株は、宝隆院が扇御殿に移居してきた頃から生育していたと考えられる。1862年に江戸から回漕された樹木は宝隆院庭園ではなく三ノ丸にあった庭間に植栽された可能性が高いが、宝隆院(池田整子)は一時期三ノ丸に居住していたので、これらの樹木を実際に見ていた可能性がある。回漕された樹木自体の生存は確認できず、樹種や樹齢の記録も残っていないのが残念である。

154年生と推定されていたNo.17のクロマツ(アカマツとの雑種の可能性あり)は、2024年1月30日に伐採され、根元の円板から樹齢は124年と推定された。中心部の成長が良かったため樹齢が低く見積もられたと考えられる。116年前のお手植えのマツと同じ頃に植えられた可能性がある。樹幹は傾斜していたものの葉量は多く、傷跡には松脂も出していたので、マツノザイセンチュウに罹患しなければまだ生きていたと思われる。実体顕微鏡でセンチュウが確認できたので最近また流行してきたマツ枯れには違いないだろうが、幹の半分が腐食しており、先端が切られた跡に穴が空いていたので、そこから腐食が広がり根元まで腐ってしまった可能性がある。現存するスギ、ヒノキ、モミなど通直で樹高の高い樹木の先端が斬られているが、過度の伐採は樹木にもダメージを与え、景観の価値も低下するので、慎重に行う必要がある。

樹齢100年以上の樹木もかなり残ってはいるが、切株も多く見られるので、安易に伐採や剪定をすることなく歴史の生き証人である貴重な樹木を守っていくことも、現在を生きる人間にとて極めて重要な課題である。

100未満の樹木は、1922年の仁風閣修繕工事および1923年(今から100年前)に久松公園が開設され、城址に桜などが植栽された時期以降から継続的に植栽されてきたことがわかる。これらの樹木は最近よく使われている外來種を含む庭木ではなく、ほとんどが鳥取に自生する多様な在来種である。このことから、宝隆院庭園を作庭・管理してきた先人の見識に敬意を表したい。

表3 宝蔵院に関する歴史年表と樹木の推定樹齢

年	月 日	年数	内 容	推定 樹齢	樹 種	調査 番号	管 理 番号
天保 5年(1834)	3月 7日	189	東館池田仲律の娘池田整子・延姫(陸姫)芝三田屋敷に誕生 (宝蔵院)				
天保 5年(1834)	3月23日	同	池田慶栄・幼名亀丸(萬松丸)江戸木崎前田家本邸に誕生 (11代藩主)				
嘉永元年(1848)	12月 9日	176	池田慶栄・11代藩主に就任(15歳)				
嘉永元年(1848)	12月24日	175	慶栄・池田整子の婚儀がとりおこなわれる(ともに15歳)				
嘉永 3年(1850)	5月23日	173	池田慶栄・国元鳥取への帰國途上に京都伏見屋敷において死去(17歳)				
嘉永 3年(1850)	10月29日	同	池田慶栄・慶栄の遺體を相続して12代藩主となる(14歳)				
文久 2年(1862)	11月29日	161	松平相模守奥向雜荷物(石燈籠・庭石・積木など)江戸より 鳥取に回漕	161	ヒノキ	3	対象外
文久 3年(1863)	3月 7日	160	宝蔵院(整子)国元に向け江戸を出発(4月12日鳥取着)	160+	スギ切株	切株1	対象外
文久 3年(1863)	7月25日	同	宝蔵院の御新敷御寝所南側へ新規に御庭築立することを 御茶屋に命じる				
文久 3年(1863)	8月18日	同	宝蔵院、慶樹殿(御新殿)が完成して移居する				
明治 4年(1871)	9月23日	152	宝蔵院、池田家上邸(元西船池田家屋敷)に移居(慶樹殿に 8年間居住)				
明治 6年(1873)	10月22日	150	宝蔵院、搬出池田家別邸(元銀札場)移居(翌年6月6日東 京に向け出発)				
1878		145		145	スギ	11	対象外
明治12年(1879)	5月21日	144	東京浜町の池田家屋敷にて宝蔵院逝去(46歳)				
明治22年(1889)	11月	134	鳥取西高校の前身が三の丸に校舎を新築(現在地)				
1894		129		129	タブノキ	12	対象外
1895		128		128	タブノキ	1	対象外
1900		123		124	クロマツ	17	仁1-19
1902		121		121+	タブノキ切株	切株3	対象外
1904		119		119	モミ	15	対象外
1906		117		117+	スギ切株	切株2	対象外
明治40年(1907)	5月10日	116	仁風閣(御座所)竣工(宝蔵院庭園・前庭・果樹園) マツと庭園にお手植え(高さ1m余)	116+	クロマツ		
1913		110		110+	モミ切株	切株5	対象外
1916		107		107	ヒヨクヒバ	5	宝5-25
1918		105		105	モミ	2	対象外
大正11年(1922)	3月 6日	101	池田仲博、仁風閣建物および扇亭建物(離れ小座敷)を 鳥取県に寄付				
大正11年(1922)	4月25日	同	鳥取県、仁風閣の修繕工事をおこなう(~6月初まで)				
大正12年(1923)	3月23日	100	久松公園開設。鳥取城跡に桜などが植栽される				
1924		99		99	モッコク	4	宝5-32
1931		92		92	スギ	14	対象外
1931		92		92	クスノキ	18	仁1-20
1932		91		91+	スギ切株	切株6	対象外
1934		89		89	ケヤキ	13	仁2-12
1936		87		87	クロマツ	8	宝5-39
1944		79		79	ケヤキ	19	仁1-21
昭和19年(1944)	9月 9日	79	池田仲博、久松山金山を鳥取市に寄附				
昭和24年(1949)	7月	74	仁風閣1階に鳥取県立科学館を設置 (同29年に科学博物館と改称)				
1951		72		72	モッコク	10	宝7-11
1952		71		71	イロハモミジ	16	宝4-6
1954		69		69	クロマツ	7	仁2-4
1958		65		65	クロマツ	9	対象外
昭和47年(1972)	3月31日	51	宝蔵院庭園復元工事を終える				
昭和51年(1976)	11月 3日	47	仁風閣の保存修理を終え一般公開される。 宝蔵院(古化粧の間)完成				
1980		43		43	ナギ	6	対象外
1992		31		31+	サクラ切株	切株4	対象外
2023		0					

(注)樹木の調査は2020年と2022年、樹齢は2023年、調査番号は今回調査した樹木の番号

管理番号は樹木管理のために鳥取市がついている番号。大径木には管理対象外となっている樹木が多い

154年と推定されていたクロマツは、2024年1月30日の伐採による円板の判別によって124年と確認された



写真5 宝隆院庭園の秋2023
鳥取の自然植生である常緑樹が多い



写真8 池越しに鳥取西高校方向を見る2022
スギ、ヒノキ、モミなどの頂部が切られている。このときは左端のNo.17のクロマツも健全に見える



写真6 上空から見た宝隆院庭園2022
扇御殿は現在の芝生上にあつたらしい



写真9 裏門付近の針葉樹群2022
樹高の高くなった樹木は先端が切られている



写真7 池から見た当時の扇御殿方向2022
扇御殿と庭園との距離はもっと近かったはず



写真10 池から宝扇庵方向を見る2022
樹高の高い整った樹形の樹木が多い



写真11 丘上のタブノキ2022

この地域の樹相種の1つであり自然に分布したと思われるが頂端が切り取られている



写真13 常緑針葉樹だが広葉樹のようなナギの葉2022
島取には自生していないので移入と思われる

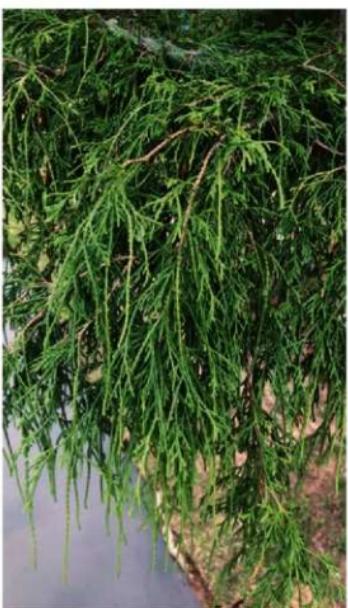


写真12 ヒヨクヒバの葉先2022

別名イトヒバといいサワラの園芸品種



写真14 タブノキと思われる切株2022
中心部は腐って穴が空いているが周辺部は健全



写真15 タブノキの切株から多数の萌芽2022

これらが生き残る可能性は低い



写真16 頂部に穴の空いたクロマツ2023

伐採痕から根元まで腐食が進んだと思われる



写真17 葉がすべて褐変して枯死したクロマツ2023
樹幹の半分くらいの樹皮が剥がれていた。倒木防止のため、2本の支柱で支えられていた

このページのクロマツはすべてNo.17のクロマツ



写真18 2024年1月30日に伐採されたクロマツ

支柱2本も一緒に運ばれていった



写真19 伐採跡に残ったクロマツの切株2024

切断面の半分くらいは腐食していた



写真20 伐採されたクロマツの切断面2024

中心部と周辺の一部が腐食せずに残っていた



写真21 標本から発生していたクロマツ稚樹2023
萌芽ではなくこのクロマツの実生と思われる。今後は次世代の樹木を育てていくことが重要だろう



写真22 クロマツ根元のイロハモミジ稚樹
近くの母樹から飛んできた種子から発芽したものと思われる

おわりに

鳥取城主の奥方として生きるはずだった宝隆院(池田整子)のために扇御殿が建立された。その眼前に作られた宝隆院庭園の景色とそこに自然に生育していた植物や植栽された樹木たちは若くして未亡人となった宝隆院の癒しになっていたに違いない。今回、関係各位のご協力によって宝隆院庭園に現在生育している樹木および切株の調査の機会を与えられた。特に貴重な樹齢調査の結果とこれまでに得られている古文書(藩政資料)の分析から、宝隆院庭園の歴史と樹木の関係について論じた。宝隆院庭園のような庭園はその時代とその後の時代の人間の営力によって作られ守られてきたものであるから、作庭の理念や技術を継承していくことはもちろん大切である。それと同時に、庭園のできる前から生きていた樹木

および作庭と同時にあるいはその後に植栽されてきた樹木にも敬意を払うとともに、長い歴史を生きてきた樹木の持つ情報にも着目していくことが重要である。樹木も生物の一員として成長し、繁殖する。このような特性を考えた上で植栽・管理し、共存していくことが必要である。

冒頭にも述べたように建造物や庭園などの歴史的な遺産は、その環境そのものを研究することが求められる。このような古文書と樹木の調査に基づいた研究方法に手探りで着手し、近年ようやく種々の可能性が見えてきた段階ではあるが、こうした方法は、小地域の歴史的な研究にも応用が可能であると考えられる。

註

- 1 仁風閣については、仁風閣発行(伊藤康晴執筆)『仁風閣の周辺一白堊の洋館と池田侯爵家のあゆみ』(2004)参照
- 2 鳥取藩主の庭園についてまとめた成果として、鳥取市歴史博物館「大名たちの庭園－江戸藩邸と諸藩城下の庭園風景－」(編集執筆伊藤、2004)があるが、絵図を中心に取り上げた成果で、作庭・造園の経緯などについては、記録資料が少ないとからほば触れていない。
- 3 鳥取県立博物館所蔵。同発行「鳥取藩政資料目録」(1998)
- 4 鳥取市歴史博物館「ここはござ城下にござる－因州鳥取の城下町再発見－」83・115頁(2010)
- 5 並と同様。臨時普請を扱う作事奉行もしくは奉行人の元には、「入用清帳」が蓄積されたに相違なく、それらはある程度の期間で非現用とされて廃棄されるか、あるいは反放紙にされたと推察する。それらの記録の一部が横の下張り文書として見い出された例がある。伝存された藩政資料群の中から漏れれた作事関係資料の保存管理の一端がうかがい知れる。
- 6 その成果の一部は、鳥取市歴史博物館「博覧を歩く一歴史と自然のファイドワーカー」(2007)および鳥取市教育委員会「鳥取城調査研究年報」第14号(2021)、伊藤(古文書)・佐野(樹木)・細田隆博(発掘)論文照。
- 7 前掲注6(2021)、佐野淳之「鳥取城跡地における樹木のサイズと樹齡—現存する樹木の年輪から読む歴史～」[鳥取城調査研究年報]第14号
- 8 德川家康の側室西郷の局(於愛の方)の法名「宝台院」を避けた「宝隆院」と改められた。
- 9 鳥取藩政資料「家老日記」(鳥取県立博物館蔵)安政5年11月朔日条。現東京都千代田区日本橋浜町3丁目44番地周辺
- 10 鳥取藩政資料「家老日記」文久2年正月11日条
- 11 鳥取藩政資料「江戸留守居日記」文久2年11月29日条
- 12 江戸より運ばれた木(樹木)や石造物は、概ね三ノ丸に運ばれて御殿改変に伴なう築庭に使用されたものと思われる。明治以後、その石造物がどうなったのか少し気になるところである。その後三ノ丸には明治22年に鳥取一中が当地に設置・開校され大きく変貌を遂げることになるが、その際に樹木は別としても、石造物(4)、庭石(70)、石井筒(2)の石造物はどこに行ったのか、城地の土地利用が大きく変化する中、石造物が宝隆院庭園に持ち込まれた可能性がないかななど、引き続きの調査が必要であると考えている。
- 13 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年4月3日条
- 14 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年5月22日条
- 15 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年4月9日条
- 16 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年4月18日条
- 17 前掲注6と同文書
- 18 伊藤康晴「鳥取城に勧請された八幡宮二ノ丸御殿の再建に関連して～」[鳥取城調査研究年報]第14号(2021)
- 19 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年7月25日条
- 20 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年8月18日条。「池田慶徳公御記」(第2巻)文久3年8月18日条
- 21 鳥取藩政資料「三上勝馬家譜」No.10121「二代大日」条
- 22 「因府年表」(岡島正義著)「鳥取県史」(第7巻)所収。
- 23 「鳥府志」(岡島正義著)「鳥取県史」(第6巻)所収はかかる。現知事公舎付近にあった東館の御庭は、江戸海晏寺の庭園を模したとする。
- 24 「福業住吉むだあるき」(拾遺)鳥取県立図書館所蔵。芳心寺の「葵山者山本宗鳳造」と記す。本慈院も「山本宗鳳作」とあるが、おそらくは「宗珉」は「宗林」の誤りではないかと考えられる。
- 25 鳥取藩政資料「家老日記」享保18年2月11日条
- 26 鳥取藩政資料「家老日記」安政5年12月25日条
- 27 例えば中沢宗益の悼懇賀「鳥取藩政資料「家老日記」嘉永5年9月14日)。近藤宗逸の仲宗民(鳥取藩政資料「家老日記」安政4年3月18日条)など。
- 28 鳥取藩政資料「安藤宜茂家譜」No.9984「七代懇右衛門」条
- 29 御茶道ではないが、穴生(穴太)役で鳥取城・池田家墓所の石垣普請に名をのこす服部儀助も「扇頭御殿御普請御用」をつとめたとあるので作庭に関与した可能性が想定される。
- 30 大鶴陽一氏よりご教示いただき。鳥取藩政資料「家老日記」元治元年正月15日条
- 31 カラタチの築堤は昭和46年における宝隆院庭園の修理の際に構築された築堤である。
- 32 鳥取藩政資料「家老日記」。明日の湖南を考える会編「資料にみる吉岡の温泉」(1998)
- 33 「新修鳥取市史」第四巻第二節「明治初年の鳥取藩・鳥取県」(2014)
- 34 弘福寺の池田慶蔭墓前にあった有栖川宮熾仁の功碑は鳥取東照宮(当時移転社)拝殿の左に移建。

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平の城郭研究15年

鳥取市教育委員会文化財課
文化財専門員 細田 隆博

はじめに

鳥取城跡内では、擬宝珠橋や中ノ御門の一部など江戸時代の城の正面玄関である大手登城路の復元が進む。この建造物復元を伴う保存整備事業の画期は、平成18年(2006)に史跡鳥取城跡保存整備基本計画が策定されたことにある。さらに翌年、鳥取市は同実施計画を策定し、当面取り組むべき事業を明確化した。この実施計画は、調査計画、利活用計画、大手登城路復元整備基本設計、保存管理実施方針という4つの計画等から構成されている。

一見して建造物復元に注目が集まりがちであるが、鳥取市が地道に取り組んできたのが調査計画の実施と公開であった。この成果として、本市は平成20年(2008)から『鳥取城調査研究年報』を刊行してきた。当時、こうした城郭に係る年報を公刊する事例は、国内に特別史跡肥前名護屋城跡、特別史跡姫路城跡、特別史跡安土城跡、史跡金沢城跡など数城しかなく、本市の取り組みは極めて先進的なものであった。そして、昨年度、発刊から15年を迎えて、多分野で大きな研究成果が発表されてきた。

そこで本稿では、この15年の歩みを、特に近年その研究が急速に進化してきた城郭研究(縄張り研究)という観点で概観してみたい。

1. 鳥取城の城郭研究の歩み

最初に鳥取城調査研究年報の公刊以前の鳥取城の城郭研究の歩みについて、千田嘉博氏の主著『織豊系城郭の形成』(2000年、東京大学出版会)を参考にしつつ、4つに時期区分し振り返る。

①江戸時代

江戸時代も18世紀頃から博物学の流行を背景として、歴史研究として城郭研究がなされるようになる。

鳥取城の場合、当該期で特に著名なのは、鳥取城研究の嚆矢である鳥取藩士岡島正義(1784~1859)の一連の考察である。

鳥取藩の侍医小泉友賢(1622~1691)が編集した因幡国最古の地誌・歴史書の『因幡民談記』の記載をもとに、岡島は文政12年(1829)に成立したとされる『鳥府志』で、近世城郭およびその城下の構造的変遷に係る考察を行っている。すなわち、近世城郭としての鳥取城の大手門は始め北ノ御門にあり、池田長吉の改築によって、中ノ御門を大手門として、現存する天球丸や二ノ丸などの曲輪が築かれたという説である。また城下も北ノ御門前を中心に戻廻し、南東方向に拡張されるという。この説は長く鳥取城の定説的な解釈として無批判に採用されていくことになる。

一方、岡島は鳥取城を語る上で欠くことができない歴史的に著名な羽柴秀吉の兵糧攻めに際して、羽柴方が築いた陣城群を7区分し、詳細な踏査記録『旧里整覧』を記した。当書には、測量に基づく各陣城の鳥瞰図などが記されているほか、自らの踏査とその記録が不十分であることを認め、「後哲予が不及所ヲ修補メ古往ノ形勢ヲ詳ニ辨セバ恐クハ藩城保護新ノ微益トモナリナン歟ト本ヨリ想願スル所也矣」と、より客観的で正確な遺構把握が、それらの保護に繋がることを指摘している。今日文化財保護の仕組みで一般的な遺跡保護に備えた正確な調査の重要性を、今から160年以上前の鳥取藩士が指摘している点は高く評価されるべきである。また、前述した『鳥府志』では、太閤ヶ平及び周辺の遺構について「稀有の旧蹟なれば、兵道に志あらん人は必経過して其構營を熟観有るべし」と今日でいう城郭研究を志す者の来訪を促している。

②明治時代から第2次世界大戦期

明治時代から第2次世界大戦期にかけては帝国陸

軍によって城郭研究が行われた時期である。

鳥取城では昭和9年(1934)に陸軍省が本邦築城史編纂のために現地調査を行っている。この調査では鳥取城全域の平面図が作成されているが、主要部分の断面図も作成されている。このうち、昭和18年(1943)の鳥取地震で崩落してしまい現在では確認できない天守台北西部の巻石垣についても平面図と断面図が掲載され、その規模を概ね理解することができる。また、この巻石垣について「(前略)其の前方に半円形の突出部を設けあり是れ天守閣基脚部を倒防する設備ならんか」と記し、その機能を考察している点は特筆される。

③戦後から1980年代

第2次世界大戦によって焦土と化した日本において各地で空襲によって失われた天守を復興しようとする動きが起こるとともに、歴史ブームを背景に昭和33年(1958)に日本城郭協会が設立されるなど、各地で城郭研究団体が結成された。このような背景の中、民間学としての城郭研究が国内で取り組まれていく。

鳥取城においては、山根幸恵(1923~2002)が昭和41年(1966)に『鳥取城』(鳥取城刊行会)を刊行する。先に記した岡島正義の考察を基本としながら、鳥取城の歴史やその価値について、わかりやすく概説した著作である。彼が画期的であったのは、当時、城内に残されていた刻印石を分析し、それまで、江戸時代の地誌などであつたく注目されて来なかつた鳥取時代の池田光政による城郭普請の関与について言及した点であった。当時、鳥取城の現存遺構のほぼ全ては、関ヶ原合戦後に入った池田長吉が構築したと信じられていた中で、新しい見解がこの時提示されたのである。

また、吉田浅雄(1924~2013)は、昭和58年(1983)に『戦国城砦 久松山鳥取城跡之圖』を発表し、久松山全体に占地した鳥取城全域の縄張図を作成した。それまで網羅的に把握されていなかった、主に山腹に残る中世城郭に廻る遺構の所在をも明らかにした。また、そればかりでなく、後に登石垣と評価される遺構の存在などの表面観察から確認できる成果も詳らかにしている。

一方で、太閤ヶ平についても、吉田はすぐれた踏査成果を発表した。彼は、岡島正義の『旧墨壁観』を基礎として、鳥取城及びその周囲に広がる陣城群を独力で丹念に測量し、正確な縄張図を作成した。この成果は、昭和60年(1985)に『秀吉鳥取城攻略の本陣及び付近遺構要図』『秀吉之天正鳥取陣営』として発表され、全国の城郭研究者の知るところとなり、鳥取城跡とその周辺の学術的価値は高まった。彼はその他にも鳥取県及び周辺地域の城郭調査を実施しており、その業績は我が国の城郭研究史上における代表的なものとして、前述した千田嘉博氏の主著『織豊系城郭の形成』内にも明記されている。

④1980年代以降

この時期は、城郭研究、文献史学、考古学の協業への嚆矢が芽生える時期である。この背景には、第1回全国城郭研究者セミナーが始まり、城郭研究の課題が全国的に共有され、研究が進展していくことや、各地で行われる城郭遺構を対象とした発掘調査が実施されるようになったという背景が大きく影響している。鳥取城跡の場合もこの頃、石垣修理に伴う発掘調査が始まることになる。

鳥取城跡の石垣は、昭和18年(1943)の鳥取地震によって崩落16ヶ所、半壊8ヶ所という甚大な被害を受けたが、被災後、修理は未着手のままであった。ようやく修理が開始されたのは、昭和32年(1957)の史跡指定後、昭和34年度からであった。最初の発掘調査は、昭和55年(1980)と翌年実施された二ノ丸走櫓石垣修理に伴い減失する上面遺構の記録保存のための調査である。この調査では、絵図に残された建物の礎石やその抜き取り痕跡を検出している。また、昭和55年には、日本で初めて修理対象石垣の記録保存を前提とした写真測量が実施されたことも我が国の文化財石垣修理の歴史では画期的な出来事であった。

さらに、平成2~3年(1990~91)天球丸石垣修理においては、修理に伴い減失する上面遺構の記録保存のための調査以外にも、解体する石垣の内部構造を把握する調査などが実施された。この過程で、現状の曲輪内から未知の石段などが発見された。石段の構築時期については遺物の検討から16世紀末から

17世紀前葉と推定されており、現存遺構が関ヶ原合戦直後に池田長吉によって築かれたという通説に再考を迫る調査成果が得られた。

2. 鳥取城の城郭研究15年

『鳥取城調査研究年報』が刊行されて以降の15年は、江戸時代における政治的配慮のもとで記された地誌などの矛盾を丁寧にあぶり出し、より確かな史資料に基づく調査研究が行われた。この結果、特に全国的な視点と各分野の協業による鳥取城ならびに太閤ヶ平の再評価が進んだ。

①鳥取城について

平成20年(2008)に公刊された『鳥取城調査研究年報1』の中で、西尾孝昌は「久松山の調査について」と題して、吉田浅雄が行った以来の山上ノ丸と中腹の遺構について踏査による調査成果を発表した。

特に注目すべきは、関ヶ原合戦直後に城主となる池田長吉が構築したと考えられていた山上ノ丸の大半は、その前段階の宮部氏の遺構であると指摘した点である。

このうち、天守台にはいくつかの改修痕跡があることは知られていたが、その部位が本丸のかつての搦め手虎口であった可能性があることを指摘した。また、山上ノ丸に所在する登石垣について、中国地方で初めて登石垣であることを確認し、倭城との関連性の中で鳥取城を評価した。登石垣とは斜面にて堅方向に構えられた石垣のこと、敵の斜面移動を封鎖する目的で築かれたものである。その導入は、豊臣秀吉による朝鮮出兵である文禄・慶長の役の際に、秀吉軍が朝鮮半島南岸に築いた倭城が起因となるという。

さらに、山上ノ丸南側斜面に見られる段状遺構については、それまで兵糧攻め時の籠城衆の所在地と推定されていたが、矢穴痕のある転石が多数見つかったことから、石取場であることを指摘した。

山上ノ丸の大部分が宮部期の遺構であるという西尾の説をさらに補強する説を提唱したのが谷本進である。谷本は、平成21年(2009)公刊の『鳥取城調査研究年報2』において、「鳥取城山上ノ丸の構造と

形態」と題して論考を発表し、鳥取城山上ノ丸と若桜鬼ヶ城の構造と形態が高い共通性があることを明らかにした。それゆえ、鳥取城主の宮部長照の支援で与力大名であった木下重賢が若桜鬼ヶ城の整備を推進したという。また、因幡における政治拠点としての鳥取城と境目の城である軍事拠点としての若桜鬼ヶ城の関係性は、但馬における出石有子山城と但馬竹田城、阿波淡路における徳島城と洲本城と共通し、それらが城郭構造の精粗に反映していることを指摘し、鳥取城と若桜鬼ヶ城は、出石有子山城と但馬竹田城などとともに豊臣朝大坂城の支城網として役割があったことを提唱された。また、谷本は、令和4年(2022)に山名氏城跡保存会が発行した『但馬の大名と出石城の石垣』の中で、但馬・因幡・播磨という地域が、天正8、9年(1580、81)頃に羽柴秀吉及びその一族が織田信長から押領した“最初の国”という歴史的位置づけを明示されており、これまで、注目されてこなかった豊臣朝の鳥取城を考えるうえで、極めて重要な背景を提示された。

一方、山麓部の遺構の再評価に取り組んだのが、筆者である。筆者は、平成22年(2010)に公刊した『鳥取城調査研究年報3』において、「鳥取城の通説を疑う～池田長吉現存遺構構築説を再考する～」と題した論考を発表。前述した平成2～3年(1990～91)の天球丸石垣修理における解体時調査を再検証し、曲輪内から発見された未知の石段を埋設する現存曲輪の造成土中から、周辺地域で慶長20年(1615)の大坂夏の陣以降に出土するという砂目積みの肥前陶器皿が出土している点などに注目し、少なくとも現存する天球丸を池田長吉が構築したという説を否定した上で、池田光政が將軍秀忠に見せた城と城下の普請計画図である『因幡國鳥取絵図』(岡山大学附属図書館蔵)や、二ノ丸三階櫓の建築様式は層塔型であり、その初現は池田長吉が城を改築した後の慶長13年(1608)以降とされることなどから、鳥取城の山麓の基本的な姿は、池田長吉父子の後に鳥取城へ入った池田光政が、鳥取藩32万石の居城として整備したという説を提示した。

②太閤ヶ平について

太閤ヶ平の遺構自体の破格な構造は、多くの研究

者に知られていたものの、後の太閤となる秀吉が在陣したことから太閤ヶ平と命名されているように、秀吉の陣という以外に解釈されることはなかった。それに異論を唱えたが西尾孝昌である。彼は平成21年(2009)公刊『鳥取城調査研究年報2』の「鳥取城の城郭遺構確認調査について」の中で、太閤ヶ平は、毛利と一大決戦を想定した鳥取城包囲の本陣とうい性格だけでなく、織田信長出陣を前提として築かれたものだという説を提示した。さらに西尾は、この後、「信長公記」内で太閤ヶ平を示した「大將軍の居城」との表記に注目。それまで、「秀吉の居城」と訳された「大將軍の居城」について、「大將軍」は当時の信長の尊称であるとして「信長の居城」であると結論。この新説が研究者間に広く認識されていくきっかけとなつたやりとりは、中井均氏の『信長と家臣團の城』(2020、角川選書)に収録されている。

また、西尾説を受けて谷本進は、平成24年(2012)公刊『鳥取城調査研究年報5』で「鳥取城攻め太閤ヶ平本陣群の検討」を発表した。羽柴秀吉の中国攻めにおける各合戦の秀吉本陣を比較検討し、破格の規模を誇る太閤ヶ平は、毛利家を討ち果たして西日本を統一する織田信長の意思を具現化したものと評価した。

3. これからの鳥取城研究

これまで述べてきたように、鳥取城の城郭研究は大きな成果を残した。その成果の一部として、令和4年(2022)4月に地元鳥取の研究者などが分担執筆し中井均氏が編集した『鳥取城』(ハーベスト出版)が新しい概説書として刊行されたことは意義深いことである。

近世城郭としての鳥取城は、かつては慶長の築城ラッシュ期に整備された城郭の一つと理解されていたが、現在では、織豊期以降、段階的に整備され、鳥取藩32万石の居城として元和期以降に大々的に整備されていった様相がおぼろげながら明らかにされてきた。また、太閤ヶ平については幻の織田信長出陣の遺構として理解されるようになった。

一方で、城郭研究の進める上で、各遺構の年代観

を特定する手法として、出土する遺物も大いに進んだ。坂田邦彦は、令和元年(2019)、『鳥取城調査研究年報12』において「鳥取城の瓦—17世紀を中心にして」を発表した。その後、18世紀以降の状況の研究も進めており、今後の成果に期待したい。

さて、ここでは、これまでの研究で不足と思われる視点や領域について筆者の思うところを述べたい。

まず、どこの城郭もそうであるが、城郭を語る上で、城郭の地政学的な意味を様々な観点から明らかにすることが必要である。そもそも鳥取が所在した因幡国は、古代以来の行政区域である山陰道における距離的な中間地であるし、畿内を中心とした権力構造を考えた場合、畿内を安定的に維持するためには必要な領域縁辺部にある。羽柴秀吉の鳥取城を巡る戦いや、姫路城や岡山城とともに鳥取城主を担った池田家による統治など、そうした地政学的な意味によるところが大きいところは忘れてはならない視点である。

また、鳥取城の城郭構造の変遷は、おぼろげながら大まかな状況は言葉の上で明らかにされてきたが、その具体像は提示できないままとなっている。限定的ではあるが、城内外で行われた発掘調査や地質調査に基づく新しい城郭や城下の様相を将来的には具体的に提示していくことも必要であろう。こうした課題がある中、令和2年(2020)に中ノ御門表門の南鏡柱礎石下から出土した未知の便槽や未知の焼土層の発見は、これまでの鳥取城を考える上で貴重な発見となった。中ノ御門は池田光政が大手門として創建したもので、その前段の池田長吉父子期も虎口として機能していた蓋然性が高いものの、それ以前に相当する層位で、便槽が発見された意味は、当時この場所は、城の出入口でなかったことを示す。織豊期の鳥取城の範囲や城下の在り様を考える上で重要な発見であった。また、より具体的に城の構造を理解する上では、現地に残る石垣の調査研究も不十分である。特徴的な石垣である巻石垣等の実態解明も道半ばといえる。

さらに、鳥取城では復元を進めめる大手登城路内の門などについて復元案作成にいたる考察は進んだものの、鳥取城内の建築的な研究も鳥取城の特性を理

解する上で進めていくべきである。

例えは、鳥取城の天守は、そもそも宮部期に創建されたものを池田光政期に二層に減築したと考えられる。宮部期の創建であれば、初期天主の系譜に位置づけることが可能であり、例えば、明智光秀創建の周山城跡(京都市右京区京北)の天主などとの比較も視野にする必要がある。初期天主は御殿の要素を持っており、その屋根は、瓦葺きでなく柿葺きなどが想定されている。鳥取城の天守も池田光政が二階へ減築した際に、柿葺きで葺かれたと考えられている。一方で、柿葺きの天守があった山上ノ丸では、天守と山麓から見える出丸の櫓が柿葺きでそれ以外が瓦葺きであり、創建当初から柿葺きであったかどうかも含めて、柿葺きが持つ意味を今後考えていきたい。

山麓に目を向ければ、城内には二つの三階櫓が建っていた。一つは二ノ丸三階櫓で、落雷による天守焼失後、事實上城の天守の役割を担うが、三層三階の櫓としては国内最大級であり、このような視点はこれまで見過ごされがちであった。また、天球丸の三階櫓は、層塔型の二ノ丸三階櫓を異なり、二重の多間櫓上に望楼を載せた形態であった。それは、岡山城の大納戸櫓を彷彿とするもので、なぜ、そのような櫓が二ノ丸よりも高台にある天球丸に創建されたのか、城主との関連性など興味が尽きない。さらに鳥取城は歴史的経緯から大規模の天守を頂かないが、城の規模を示す要素として天守に代わる指標になっていくのが、城の宮殿化を示す御殿の存在である。鳥取城は幕末に至ると、二ノ丸御殿、三ノ丸御殿、扇御殿という3つの巨大御殿が城内に建ち並んでいた。それに付随する庭園や宗教施設の在り方など、これまで注目されてこなかった要素の研究も求められる。

一方、太閤ヶ平については、谷本が検討したように同時期の秀吉本陣との比較はなされたが、それ以上の研究が進化しているとは言い難い。筆者は、太閤ヶ平は、後に秀吉が築く石垣山城(神奈川県小田原市)や、肥前名古屋城(佐賀県唐津市)、さらには機張城(大韓國民共和国釜山広域市)の中枢城の祖形と位置づけている。石垣山城や肥前名古屋城の繩張り

は黒田官兵衛(孝高・如水)が担ったとされ、現存する機張城は、文禄・慶長の役に際して、官兵衛の息子、長政が築いたものであり、これらの関連性から太閤ヶ平の繩張りは、黒田官兵衛の手によるものとの推定したいところであるが、これが妥当かどうか今後のさらなる検討が待たれる。いずれにせよ、太閤ヶ平は、当時の政権が担う戦闘の形態を如実に示す代表的事例として、世界史的な検討の中で人類の顕著な普遍的価値を確立しうる重要な遺構であることは間違いない、こうした観点での研究も追及してもよいであろう。

おわりに

本稿が掲載された『鳥取城調査研究年報』は本号で17号を数える。近年はこれまであまり注目されてこなかった樹木にも焦点をあてた論考が掲載されており、鳥取城研究の進化を示す好例といえる。今後、こうした分野も含め、鳥取城や太閤ヶ平の本質的価値を明らかにするためにも、この年報が末永く公刊され、鳥取城の研究が、我が国における城郭の研究の一助となり続けることを期待したい。

なお、本稿は、鳥取地域史研究会が令和5年(2023)2月12日に鳥取県立博物館で実施した記念講演『鳥取城研究の15年』において筆者が発表した内容をまとめたものである。

参考文献

鳥取市教育委員会

1987 『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理概要報告書』

鳥取市教育委員会

1997 『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書』

執筆者

【報告1】

宝隆院庭園の歴史と樹木

佐野淳之（森林教育研究所・樹木医）

伊藤康晴（鳥取市歴史博物館学芸員）

【報告2】

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平の城郭研究15年

細田隆博（鳥取市教育委員会文化財課）

鳥取城調査研究年報 第17号

発行 令和6年(2024)3月31日

編集 鳥取市教育委員会文化財課
鳥取県鳥取市幸町71番地
〒680-8571 電話(0857)30-8421

印刷 日ノ丸印刷株式会社
鳥取県鳥取市寿町915
〒680-0813 電話(0857)22-2248
